

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

藤 井 直 正

一 は し が き

昭和四十七年三月、奈良県高市郡明日香村大字平田に所在する高松塚古墳の発掘調査が行なわれ、日本考古学史上に画期的な成果をもたらしたことはまだ記憶に新しい。

その数ある成果の中でも、本古墳の主体部である横口式石槨の内部の壁面に描かれた、人物を主題とする彩色絵画の発見は、考古学関係者ばかりでなく、国民全体を古代のロマンにさそう大きなできごとであった。そして、これを契機に、この壁画の意味するもの、その源流、さらに横口式石槨を主体とする終末期古墳のあり方等、さまざまな課題が提出され、論議されることになったが、それにも増して、こうした類例のない壁画をもったこの古墳の被葬者についても大きな関心が寄せられることになった。

高松塚古墳は、直径十八呎、高さ五呎の小円墳であるが、調査報告によると、古墳の南側から頂上にかけて、盗掘と思われる変形があり、石槨の一部を打ち破って何者かが侵入した痕跡がみとめられている。従って槨内は攪乱されており、人骨も全体がのこっておらず、副葬品も海獣葡萄鏡一面、大刀の飾金具等がのこっていただけであり、壁画の一面（四神図のうち南方の朱雀）も、盗掘孔のために欠失している状態であった。⁽¹⁾

高松塚古墳をふり出しに、古代文化のふるさと、飛鳥の地における古墳の発掘と新事実の発見はさらにつづく。昭和四十九年十二月には中尾山古墳の発掘調査が行なわれ、墳丘が八角形であったことがわかり、記録に見える檜隈大内陵（天武・持統陵）の墳形と合わせて新しい問題を提起することになった。⁽²⁾ つづいて、昭和五十三年三月には、同じく明日香村大字真弓に所在するマルコ山古墳の発掘調査が行なわれた。飛鳥の地に所在する終末期古墳の一つであり、高松塚古墳と同じように、彩色壁画の発見や、それ以上の成果を期待する人びとの注目を集め、調査の進

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

行状況は逐一報道された。

このマルコ山古墳も、直径十五呎、高さ六呎の円墳であるがやはり盗掘の痕跡があり、横口式石槨の一部が、高松塚古墳とまったく同じ手口で打ち砕かれていた。石槨の内部には副葬品がほとんどのこっておらず、壁画の描かれていないことも判明した。また、この古墳でも被葬者がクローズアップされ、人骨の調査結果に異常な関心が寄せられたが、人骨は部分的にしかのこっておらず、とくに頭蓋骨がないということであった。さらに、盗掘の時期は、盗掘孔の付近から出土した瓦器碗から、中世であることが大きく報道された⁽⁹⁾。

ところで、私が標題をテーマにしてそれに取組んで見ようと思ったのは、このマルコ山古墳の報道以来のことである。それは、高松塚古墳にしてもマルコ山古墳にしても、共に「盗掘」の痕跡があるとされ、調査に直接関係された方がたも「盗掘」とし、報告書をはじめ、その他各種の書物にも「盗掘」として扱われているが、しかし「ほんとうに盗掘なんだろうか」という素朴な疑問に出發しているのである。

日本全国に数ある古墳の中で、築造された当時から現在に至るまで、まったく無きまま遺存しているものは数少ないであろう。全国の古墳のすべてが発掘され調査されたわけではないが、これまで発掘調査された古墳の一つ一つについて、報告書を見ると、「後世の攪乱」あるいは「盗掘」という表現で記されている例がほとんどである。しかし、慎重にしかも冷静に考えて見た場合、古墳が築造された時から現代に至るまで、古墳に加えられたさまざまな現状変更のすべてが、「後世の攪乱」あるいは「盗掘」という表現ですまされるものなのだろうか。「盗掘」とは文字通りに解釈すると、古墳の中に副葬されている品物を「盗み取るために古墳を掘ること」である。しかし、こうした後世の現状変更が、単に物を盗みとること以外に、何らかの目的のために「古墳（墳丘・主体部をふくめて）を掘る」こともないではなかったのだろうか。

マルコ山古墳の発掘が行なわれている間中、新聞各紙は、調査の進行状況と日々の成果を逐一克明に報道したが、いま記したような素朴な疑問をふまえての所見がある機会にある親しい方に洩らしたところ、読売新聞記者の興味をひいたようで、三月二十日付の同紙上にその所見が掲載された（第1図）。実はその所見が、本稿の主題であるが、私としては単なる思いつきではなく、何年も前からそうした考えを持ちつづけて来たことを述べたのにすぎない。

要は、これまで古墳の発掘調査が行なわれた際に、築造後から現在に至るまでのある時期に、古墳の墳丘あるいは主体部に対して加えられた人工的行為に対して、「後世の攪乱」あるいは「盗掘」という表現でとらえられている事象について、人工的行為の動機をそれなりに見極め、

その行為がどういう理由で行なわれたのかということを歴史的に意味づける必要があるのではないかということへのアプローチなのである。その解明は、とりも直さず、四・七世紀に築造された古墳が、どういう経過をたどって今日まで伝えられたのかという認識でもあり、また、古墳が後世にどのように意識されていたのかという思想的背景の究明にもかかわる問題であるとも思うのである。まだ研究の途上であり、十分な推論ができ上っているわけでもないが、先に記した問題提起の上に立って、これまで考えて来たことを卒直に開陳し、大方のご叱正を仰ぎたいと思う。

なお、標題の「発掘」という字句であるが、今日でいうところのいわゆる学問的な意味での発掘を意味するものではない。他に適切な言葉が見当たらないために使用したまでであって、古墳（陵墓をふくむ）に対して加えられた後世の掘さくとそれに伴う行為を広義に「発掘」ととらえたにすぎない。

- (1) 高松塚古墳は中間報告書、その他数多くの書物が刊行されているが、本稿では、末永雅雄・井上光貞編の『高松塚古墳と飛鳥』（中央公論社、昭和四七年九月）及び『明日香村史』上巻（昭和四九年八月）を参照した。
- (2) 明日香村教育委員会『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』（昭和五〇年三月）
- (3) 網干善教・猪熊兼勝・菅谷文則氏「マルコ山古墳の発掘調査」（『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』昭和五三年五月）

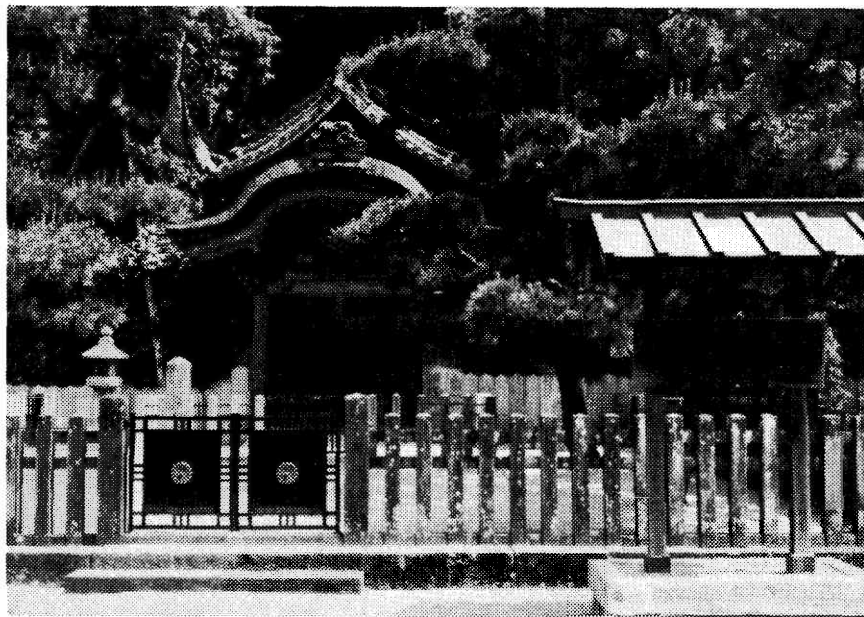
二 文献に見える陵墓の発掘

全国におそらく十萬カ所をこえると看做されている古墳の中で、後世の文献にその名や伝承が記録されているものは、そのうちの位の比率を占めているだろうか。

古墳の中でも、天皇・皇族の墳墓、すなわち陵墓については、各時代を通じてそれへの関心が高かったこともあって、文献は比較的多い。記紀には天皇陵造営の記事が見られ、それにつながる行事や伝承も記されている。律令制度下において、陵墓は治部省諸陵司の所管であり、平安時代には諸陵寮と改称されたが、『延喜式』卷二十一、諸陵寮には、陵墓の名称・所在地・兆域・守戸・陵戸について詳細な記載がある。

ところで、いまここで問題となる陵墓の発掘―盗掘をふくめて―に関する文献として、古くから考古学者の間に知られているものに、『阿不幾之山陵記』がある。改めて述べるまでもなく、天武・持統陵、すなわち奈良県高市郡明日香村野口に所在する檜隈大内陵が、鎌倉時代の文暦

二年（一二三五）に掘られた時の記録である。また、『扶桑略記』には、これに先立つ、平安時代末の康平三年（一〇六一）に盗人が推古天皇陵を発見したことが記され、つづいて康平六年（一〇六四）に、これも明らかに盗賊が、現在の奈良市山陵町に所在する成務天皇陵に侵入した記事が見えている。このほか、考古学の関係者に十分知られておらず、また従来それほど関心を持たれていなかったものに、大阪府南河内郡太子町の聖徳太子磯長墓があり、さらに、直接古墳ではなく奈良時代の火葬墓であるために、別個の観点からとらえられて来た奈良県生駒市の行基墓がある。この行基の墓が発掘され、現在破片だけが遺存している舍利瓶が出土したのは、天武・持統陵が発掘されたのと同じ文暦二年なのである。これはまったく偶然のことかも知れないが、その行為のもととなった思想的背景に何かつながりがあるように思われてならない。実はそのことが本稿の発想の原点であり、本稿の主題なのである。ここでは、これまでよく知られている文献ではあるが、一まず以上三つの陵墓と行基墓に関する文献を改めて紹介し、問題点を摘出してみることしたい。



第2図 聖徳太子磯長墓

1 聖徳太子磯長墓

聖徳太子を葬った磯長墓は大阪府南河内郡太子町大字太子、「王陵の谷」とよばれている磯長（しなが）谷のほぼ中央にあり、同じ磯長の地域に所在する敏達・用明・推古・孝徳の四天皇陵と共に「梅鉢御陵」の一つとして有名である。聖徳太子は、『日本書紀』によると、推古天皇の三十年（六二二）に四十

九才をもって薨去され、磯長の地に葬られたことが知られるが、

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

『延喜式』には、

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

橘豊日天皇之皇太子名云「聖德」。在河内國石
磯長墓。

川郡。兆域東西三町。南北二町。守戸三烟。

と記されている。墓は直径約五十四呎、高さ約七呎をはかる大円墳で、周囲には「境界石」とよばれる、鎌倉時代と江戸時代の板碑が二重にめぐらされている⁽¹⁾。主体は南に開口する横穴式石室といわれ、明治の初年までは自由に出入することができたということであり、その実見記をもとに、本古墳の構造を究明された梅原末治博士の論文、さらに今年の五月に物故された田中重久博士の論文が、ともに考古学界に著名である。とくに、田中重久博士は、法隆寺の僧顯眞の著わした『聖德太子傳私記』を引用して、梅原論文の不備を指摘されているが、このたび私の所見をまとめるに当たって啓発されるところが多であった。

現在、磯長墓として治定されているこの古墳が、ほんとうに聖德太子を葬っているのかということについては、他の天皇陵と同じく疑問視する向きもないではない。しかし、奈良時代には、御廟寺として現在も法燈を伝える叡福寺が墓前に建立され、平安時代以後は聖德太子讃仰のひろまりと相まって、聖德太子御廟とされて来たのが本墳であることから、疑問をさしはさむ必要はないだろうというのが私の考えである。

さて、この聖德太子墓のことが、巷間の話題に上ようになったのは、平安時代の天喜六年（一〇五四）の事件が一つのきっかけであった。それは、この年の九月二十日に、「太子御記文」と称するものが、太子廟のほとりから出現したという事件である。後世の記録ではあるが、

『古事談』第五、神社佛閣（天王寺）の項に、

天喜二年九月廿日、聖德太子御廟近辺坤方爲立石塔。引地之間。地中有似宮石。掘出之宮也。長一尺五寸計。広七寸計。開見之處御記文也。仍天王寺奏聞。由。件御記之狀云。

吾爲利生。出彼衡山入此日域。降伏守屋之邪見。終顯佛法之威德。於所々造立四十六箇之伽藍。化度一千三百余之僧尼。制紀法花勝鬘維摩等大乘義疏。斷惡修善之道。漸以滿足矣。下石。今年歲次辛巳。河内國石川郡磯長里。有一勝地。尤足稱美。故點墓

所已畢。吾入滅以後及「千」四百卅余歲。尔時國王大臣發起起寺塔。願求佛法耳。上石。文也。

此夏天王寺別當桓舜僧都。依執柄仰。參向彼御廟。販洛談申云。其所住僧。前年爲建立私堂。掃除其地。其夜夢人來云。此地不可立堂舍。早可停止。此傍地可宜云。依此夢。止初地。建立立他所畢。而初所今年掃除之間。所掘出此石函也。件

函有^ニ身蓋^一。如^ニ几帳^一。足^ニ其色褐色^一。以^ニ如^レ針之物^一。銘^ニ件字^一也。自^ニ彼年^一及^ニ今年^一四百卅六年。云々
という記事がのせられている。その大要は、御廟の近くに石塔を建てようとして地均しをしたところ、地中から身と蓋（蓋＝ふた）のある褐色を呈した宮（はこの）のような石が出土し、身と蓋の内面（？）に、引用しているいわゆる「太子御記文」が針のようなもので刻まれていたというのである。

これとおそらく同じできごととは、法隆寺の僧顯眞の著わした『聖德太子傳私記』⁽⁴⁾にも、「太子御廟ノ注文出現ノ事」として、

後冷泉院第十年也、天喜二年歲次甲午僧忠禪爲起寶塔、削手干地、而間地中掘出一銅函銘曰（以下御記文）

と記しているが、ここでは銅函となっている。しかし、忠禪という僧が宝塔（石造？）を建てるために……というように人物と目的がはっきりと記されていることは重要である。

この「太子之御記文」なるものは、当時、太子の筆文と信じられていたらしい。石函（太子伝私記では銅函）の形状は、長さが一尺五寸、広（幅のことであろう）さが七寸で身と蓋とからなっているといえ、聖德太子墓の所在する同じ太子町から出土した「高屋枚人墓誌」や「紀吉繼墓誌」のような瓦製または石製の墓誌の形状に近いが、はたしていつごろのものなのだろうか。また「太子之御記文」が聖德太子自身の筆、あるいは聖德太子当時のものと考えていいのだろうか。ここに一つの問題がある。それにしても、このことから、聖德太子墓をめぐってさまざまのできごとが生じたりしいことは確かである。『聖德太子傳私記』には、つづいて次の記事がのせられている。

或^ル記云、私^ニ云^ノ此^ノ記文自^ニ辛巳歲^一、至^ニ于天喜二年甲午後冷泉院御時^一、成^ニ四百三十四年^一云々但依^ニ壬午年御入滅者^一、四百卅三年也、記注餘歲之餘字、更非^ニ四之字^一、又令^レ埋^ニ此石文^一給者前歲也、即法隆寺釋迦佛光之銘文、悉作法同之、例^{シテ}可^ル知、此自康仁之入^ニ御廟^一時也、六十一年个年之後也。

（中 略）

起注文事、天喜二年九月廿日未時許、爲^レ立塔土壇ヲ築作間、件戌亥方土一文許り穿鑿間爾有^レ石、廣一尺許也。

爲^ニ去^ニ此石^一尚土穿爾下^ニ又有^ニ以^レ宮之石^一、名色不^ニ見知^一石也、但青石長一尺一寸許、廣七寸許、有^ニ身蓋^一下乃ハ三寸許、上ノハ二寸五分

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

許、内之上下ニ有ニ文字、件見ニ此事之人、忠禪夫二人也、之内童一人、法師一人・已上三人、彌致ニ祈禱ニ之日深卅日、人ニ不知語、以ニ今月廿二日同行僧行命等ニ、令ニ開見即此文字耳、依ニ此謹尊恭之忠禪師談法之由、以ニ康平六年癸卯秋ニ此顯了、被ニ禁ニ於獄ニ處已了。甚怖以ニ古文書ニ寫了。ここでは、いわゆる「太子御記文」の出現した状況が述べられているが、末尾の方の忠禪の行動について述べているところは意味慎重である。

さらに後に行くと、

後冷泉院御時天喜二年甲午九月、在ニ誑感聖、其名云ニ忠禪、入ニ太子御廟堀、現ニ不可思議作法、爰時人疑ニ太子御舍利破損之分、爲ニ令ニ注進ニ勅宣申上、以ニ法隆寺三綱康仁等、令ニ參入御廟内、即康仁奉ニ拜見ニ三御棺、一御棺中在ニ頭骨髑髏一許、余更无ニ者云々。或云ニ三御棺中東御棺中在ニ御身、只御容儀如ニ存日之時床上覆給、薰ニ異香廟中、如ニ心中月晴、爰住ニ隨喜思、彌感涙難ニ押云、已上ニ說中後說正說云々。

まだ記事はつづいているが、先に登場した忠禪を「誑感聖」とし、その行動が常軌を逸していたことをほのめかしている。以後の記事は、忠禪の行動によって太子の舍利が破損してはいないかを確かめるため注進をし、勅宣をもって法隆寺三綱の職務であった康仁が御廟内に入って棺の状態を見聞したようである。この記事は、田中重久博士も指摘されたように、太子廟の内部における棺の配置を知る上で重要である。以上のことから考えると、聖徳太子墓には当時ある程度自由に入出入りすることができたようで、発掘を伴ってはいないが、太子墓をめぐってさまざまな取沙汰のあったことを知ることができる。

『聖徳太子傳私記』には、もう一項、本論の展開に重要な記事がみとめられる。

或又土佐院中院御時、元久年中、太子御廟寺々僧淨戒顯光二人構ニ誑惑入ニ廟中、盜ニ太子御牙齒、遊ニ行于世界、惑賣買或勸ニ物人云々。此僧二人者、本對麻住僧也、後移ニ住太子御廟、以此ニ御齒、奉ニ授東大寺勸進聖人南无阿彌陀佛、俊乗坊、即以ニ此齒奉ニ納于身内、奉ニ造十一面觀音、歟云、伊賀國造大伽藍一名ニ新大佛云々。其淨戒顯光云、太子實如ニ容儀存日如ニ眠ニ床上云々、然則先康仁寺主說今淨戒顯光言同、无ニ異義、以知太子住ニ全身體一御云事。

元久年間（一二〇四・六）といえ、もう鎌倉幕府の開かれる直前であるが、太子御廟寺（叡福寺）の僧であった淨戒・顯光の二人が、太子

墓に入り、太子の棺から牙齒を取り出し、それを諸国を廻って売買したり、人にすすめていたというのである。また、それを東大寺勧進上人であった南无阿彌陀佛に授けたという。この南无阿彌陀佛とは本文に注記されている通り、治承四年（一一八〇）、平重衡による南都焼討によって焼失した東大寺復興に当たった俊乗坊重源のことである。重源はこの牙齒をもって、自らが造営した伊賀新大仏寺の十一面観音像の胎内におさめたという。

ここに記されていることが、どの程度真実を伝えているのか疑問がないわけではないが、当時太子御廟が異常なまでに信仰され、太子の遺体（牙齒をふくめて）についても著しい関心があったことを物語っている。この遺体への関心乃至崇拜は、後に述べる舍利信仰と密接につながりをもつものと思われる。

新大仏寺は、重源が伊賀国の所領に建立した別所の一つで、現在の三重県阿山郡大山田村富永に遺構をのこしている。⁽⁵⁾ 重源の造立したという十一面観音像は後世の補修のため当初の面影をのこしていないが、往時の壮大さを物語っている。⁽⁷⁾

重源と聖徳太子墓とはかわりがないではなかったようで、『南無阿彌陀佛作善集』に、

太子御廟阿彌陀佛建立御堂

とある。このことから、『聖徳太子傳私記』に記されていることからは、ある程度真実らしく、また重源とのつながりもあったものと考えられ、当時異常なまでにひろまった聖徳太子信仰や舍利信仰の中で、聖徳太子墓への敬慕・崇拜の高まっていたことを物語っているのである。

- (1) 外回りのものは花崗岩製で、墓の外周に隙間なくめぐらされている。これは江戸時

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景



第3図 新大佛寺の現景

代の享保十九年（一七三四）に大坂の人樋口正陳が願主となって建立したものである。内まわりのものは凝灰岩製で、原形をとどめるものはほとんどないが、もとは墳丘をとりまいていたのであろう。これは鎌倉時代のもと考えられており、聖徳太子墓への讃仰がひろまった時期の所産と見られる。

(2) 梅原末治博士「聖徳太子磯長の御廟」（『聖徳太子論纂』所収、大正十年三月）。なお、本論文は、『日本考古学論攷』（昭和十五年十一月）に再録されている。

(3) 田中重久博士「聖徳太子磯長山本陵の古記」（『聖徳太子御聖蹟の研究』所収、昭和十八年十月）、本論文は、森 浩一氏編『論集終末期古蹟』（昭和四十八年四月）に再録されている。

(4) 『聖徳太子傳私記』は、太子傳古今目録抄ともいい、法隆寺の僧顯眞の著わしたもので、嘉禎四年（一二三八）ごろの作と考えられている。上・下二巻から成り、法隆寺の寺誌からはじまり、太子伝に関する考証が記されている。

(5) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌、銘文篇』（昭和五三年七月）

(6) 川勝政太郎先生『伊賀』（近畿日本ブックス、昭和五四年二月）田中 淡氏「伊賀新大仏寺の発掘調査」（『月刊文化財』第一八七号、昭和五四年四月）

(7) 田辺三郎助氏「伊賀別所本尊考」（『佛教藝術』第一〇五号、昭和五一年一月）

2 成務天皇陵

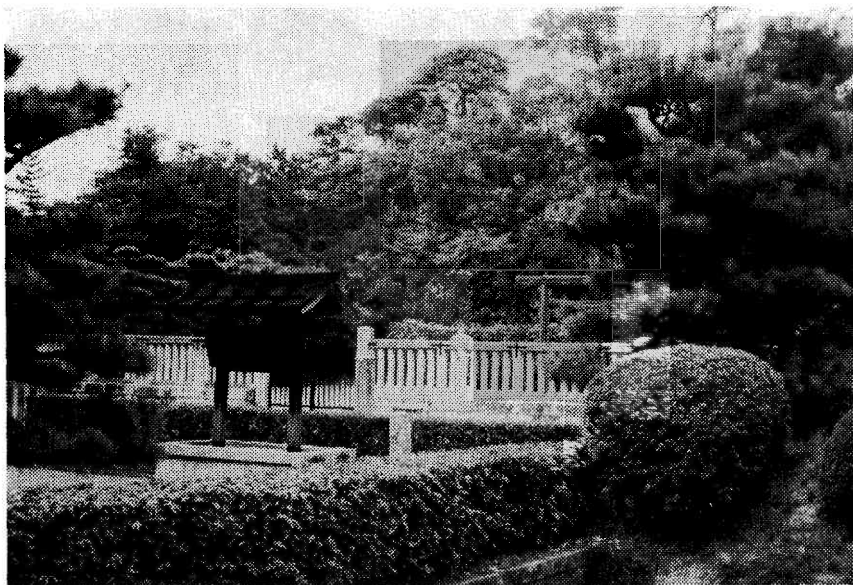
成務天皇陵は、奈良市山陵町に所在する通称石塚が治定されている。『延喜式』諸陵寮には、

狭城盾列池後陵。

志賀高穴穗宮御宇成務天皇。在_二大和國添下郡_一。兆城東西一町。南北三町。守戸五烟。

とあり、それは奈良市の西郊に位置し、佐紀盾列古墳群^{たてなみ}を形成している前方後円墳の一つである（第4図）。

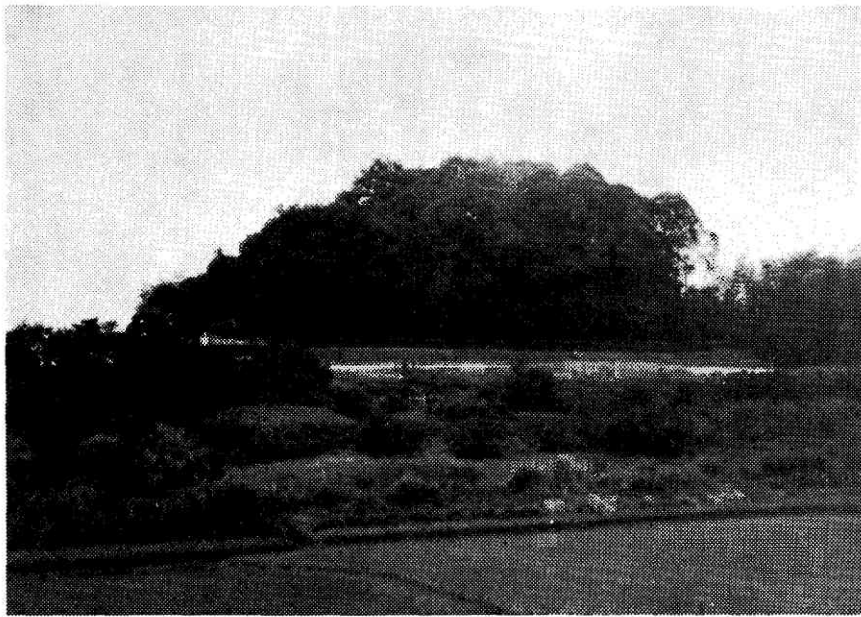
この御陵が盗賊によって発（あば）かれるという事件があったのは、平安時代の康平六年（一〇六三）のことであった。当時としては大へんな事件であっ



第4図 成務天皇佐紀盾列池後陵

たらしく、『扶桑略記』第廿九の後冷泉天皇康平六年の条に、

五月十三日。發遣山陵使。是依去三月盜人撥池後山陵掠奪寶物也。
と先ず記し、つづいて、



第5図 天武・持統天皇陵大内陵

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

九月廿六日。被_レ定_下山陵寶物等如_レ舊可_ニ返納_一之狀_上。紀傳明經等諸道勘文。并犯人罪名。被_レ勘_ニ法家_一。

さらに、

十月十七日。興福寺僧靜範坐_ニ山陵事_一。配_ニ流伊豆國_一。緣坐者十六人。僧俗共配_ニ流安房常陸佐渡隱岐土佐國_一。此日。立_ニ興福寺使_一。參議左大辨藤原經家卿。少納言源師賢等。爲_レ遠_ニ流寺家僧_一被_レ告_ニ其由_一也。

と、事件の経過と顛末を述べている。

陵のどこから、どのように侵入し、どんな方法で、どんな品物を掠奪したかについてはこの記事からでは知る由もないが、陵を発いて物を盗み取るということが遠流に値する大罪であったこと、当時における処置のし方がわかる点で興味がある。

康平六年のこのできごととは、成務天皇陵を目標に、実際に物品の掠奪（古墳の副葬品を目当てとする）が目的であったのであろう。この主犯者が静範という興福寺の僧侶であったことは記憶しておく必要があるように思われる。

3 天武・持統陵

壬申の乱の英主であり、日本古代史にかがやく天武天皇、そしてその妃であ

り、のち皇位を継承された持統天皇の合葬陵は、奈良県高市郡明日香村野口にある檜隈大内陵と定められている（第5図）。

『日本書紀』を見ると、天武天皇はその治世十五年に当たる朱鳥元年（六八六）九月丙午の日に崩じられた。と同時に皇后であった鸕野讃良皇女が「臨朝稱制」、すなわち皇位を継承された。これが持統天皇である。そして、同じく『日本書紀』持統天皇元年条には、

冬十月辛卯朔壬子。皇太子率公卿百寮人等。并諸國司。國造及百姓男女。始築大内陵。

とある。また、持統天皇の崩御は、『續日本紀』によると、文武天皇の大寶二年（七〇二）のことであり、同三年十二月の条に、
癸酉、從四位當麻真人智德率諸王諸臣奉諫太上天皇諡曰大倭根子天之廣野日女尊、是日、火葬於飛鳥岡。壬午。合葬於大内山陵。
と記されている。天皇の遺骸を火葬に付したのは持統天皇が最初であり、遺骨は大内陵に合葬されたのである。『延喜式』には、

飛鳥浄御原宮御宇天武天皇。在大和國高市
檜隈大内陵。
郡。兆城東西五町。南北四町。陵戸五烟。

とある。

この檜隈大内陵は、かつて別のところに定められていたが、明治時代になって『阿不幾乃山陵記』が発見され、「阿不幾」という地名から字青木に所在する現在の陵がそれに当たることが明らかになったといういきさつがある。

『阿不幾乃山陵記』は、鎌倉時代の文暦二年（一二三五）に、この大内陵に盗人（？）が侵入し、陵内におさめられている数かずの品物が取出されるという事件がおこったが、その記録である。陵の墳形、陵内（石室）の様子、御棺、御遺骨の状態などが詳細に記されており、大内陵の具体的な様相と埋葬状態を知ることのできる資料として、つとに考古学者に知られている文献である。『改定史籍集覧』に収録されているが、その奥書によると、原本は京都府の人、中勘兵衛敬忠の所蔵であり、包紙に記されているこの人の鑑識によると「此筆者之事、按所藏法界次第異書云、嘉祿三年二月廿九日 及寛信大阿闍梨東寺拜堂記 奥書云、承久元年八月廿一日法 於佐女手宿坊刻書之求法沙門定真 務御房御自筆草本書之等全以同手 一目瞭然蓋是梶尾明慧上人弟子方便智院開基空達上人 定真所書歟」とある。

『阿不幾乃山陵記』の内容については、これまで様々の角度から検討が加えられていながら、この書の伝来経路や筆者についてはまったく注意されていないが、この書の筆者が山城梶尾高山寺を開創した明恵上人の弟子に当たる空達上人定真であるということは重要である。定真とい

う僧が、大内陵を発掘したこと、あるいは発掘した人びとどのようなかわりがあるのかは不明であるが、随分克明な記録をのこしている点において、この事件と深いつながりのある人物であったことを示唆しているのではないだろうか。

この『阿不幾乃山陵記』は、斎藤忠博士が、『日本古代遺跡の研究総説』に、「原本をもととした文を紹介しておこう」として全文を収録されているが、史籍集覧所収の原本を対比すると誤植がみとめられる。また、『明日香村史』上巻にも全文が載せられているが、これにも誤りがある。よく知られた文献であるが、そうした意味で改めて全文を掲げておくことにしたい。

里号野口

阿不幾乃山陵記

□□□□□□

盗人乱入事

文暦二年三年廿日廿□□
両夜入云々。

件陵形八角石壇一匝一町許歟。五重也。此五重峯有森十余株。南面有石門。門前有石橋。此石門盗人等纒入一身通許切開。

御陵内有内外陣。先外陣方丈間許歟。皆馬腦也。天井高七尺許。此毛馬腦。無繼目。一枚打覆。

内陣広南北一丈四五尺。東西一丈許。内陣有金銅妻戸。広左右扉三尺五寸七分。扉厚一寸五分。高六尺五寸左右腋柱広四寸五分、厚四寸、

マクサ三寸鼠走三寸。冠木広四寸五分厚四寸。已上。金銅。扉金物六内小四分許。三寸五分。大二寸四分許。已上形如蓮花返花。古木形師子也。内陣三方上下皆

馬腦歟。朱塗也。御棺張物也。以布張之。八角也。朱塗長七尺、広二尺五寸許。深二尺五寸許也。御棺之蓋ハ木也。朱塗御棺ノ床ノ金銅厚五分床上ヲ彫

透左右二八尻頭四、クリカタ四。尻二。御骨首ハ普通ヨリスコシ大也、其色赤黒也。御脛骨長一尺六寸。肘長一尺四寸。御棺内紅御衣朽少々在、

之。盗人取残物等被移橋寺内。石御帶一筋、其形以銀兵庫クサリニシテ以種々玉飭之。石ニアリ。形如連銭。表手石長三寸。石色如水精。似

玉帶。御枕以金銀珠玉飭之、似唐物。依難及言語不注之。仮令其形如鼓、金銅桶一納一斗許檜。居床、其形如礼盤鑲少々クリカタ一在之。

又此外御念珠一連在之、三匝虎珀御念珠。以銅糸貫之。而多武峯法師取了。

又御棺中銅カケカ子二在之。已上記如此。

ここに記された、大内陵の状態は考古学の各書に紹介されていることであるので本稿では省略するが、檜隈大内陵に何者（阿不幾乃山陵記は冒頭に「盗人乱入事」と記している）かが侵入した事実は見逃すことができない。同じ年に行基墓が託宣によって発掘されている事実と照合すると、

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

単に物盗り以上の何らかの理由があったのではないかと考えられるのである。

大内陵に関するこの事件は、当時の社会に大きな衝撃を与えたらしく、作者は不明であるが、鎌倉時代の末に編さんされた『百練抄』にも、四條天皇の嘉禎元年（一二三五）（文暦二年は九月十九日に改元されて嘉禎元年となる）四月の条に、

八日庚午。……或人云。去月廿日以大和國高市郡天武天皇御陵爲_二群盜被_二穿鑿_一採_二取重寶_二云々。多量金銀之類云々。

と記し、また当時歌人として聞こえた藤原定家は、その日記『明月記』の、同じく嘉禎元年四月の項に、

廿二日……發御陵盜事、天武天皇大内山陵云々、只白骨相遺、又白髮猶殘云々

と、また同年六月の項には、

四日……來十四日天武天皇山陵使可遣勅使、參議無其人由長朝催之云々、抑山陵使事諸陵頭未復任、助又闕、被任之後可有沙汰云々

さらにつづいて、

六日_欠丁卯己後、天晴、暉尋入來之次語、奉見山陵者、傳傳說、每聞増哀働之思、於御陵者又奉固由有其聞、定簡略歟、於女帝御骨者、爲犯用銀篋、奉棄路頭了、雖塵灰猶可被尋收歟、等閑沙汰可悲事歟

と記し、当時この事件に対処した朝廷の様子や暉尋（おそらく僧で、この事件の状況を知っている人物）を通じて聞いた山陵のありさまと定家自身の感想を述べている。

これらの文献を通じて見ると、文暦二年における大内陵の発掘が、『阿不幾乃山陵記』に「盗人」とし、『扶桑略記』に「群盜」と表現している字句をそのまま受け止めて、これまた単なる物盗りであるといってしまうばそれまでであるが、先に記したように『阿不幾乃山陵記』そのものを書きのこした人物が高山寺につながりのある僧であったことや、定家が暉尋という僧から伝聞していることなどを考え合わせると、事件の背景にこれまた僧たちの姿が浮かんで来るのである。

4 行 基 墓

奈良時代の高僧であり、菩薩と仰がれた行基は、天平二十一年（七四九）八十二才の高令でその生涯を閉じた。『續日本紀』の同年二月条に

は、その入寂と業績をたたえた記事がのせられている。

この行基は、大和国平群郡生駒山の東の地に葬られた。そこは現在の奈良県生駒市有里町であり、旧竹林寺の境内に方形の封土をもつ墳墓があり、国の史跡に指定されている(第6図)。

ところで、文暦二年(一二三五)八月二十五日という日に、この行基の墓から銀製の瓶におさめられた舍利が掘り出された。瓶は破片の一部が現存しており、「行基舍利瓶」として知られている。その表面に罫線が引かれ、銘文が刻まれているが、現存の破片で判読できるのは、

年 別

備特居其上雖然

一年二月二日

於右京



第6図 行 基 墓

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

の十八字である。「舍利瓶記」の全文は幸いにも、唐招提寺に伝えられている天平二十一年(七四九)沙門真成の著わした『大僧上舍利瓶記』によって知ることができる。行基墓およびこの舍利瓶等については、梅原末治博士のくわしい論考がある。⁽¹⁾これによっても、行基が天平二十一年二月二日、大和国菅原寺において遷化し「二月八日に大倭国平群郡生駒山之東之陵に火葬された」ことが知られるが、それが現在伝えられている墓域であることは疑ない。⁽²⁾文暦二年における舍利出現の事情は、竹林寺の僧寂滅から本寺である唐招提寺に差出した『謹注進行基菩薩生駒山御廟^{大和國有里村}を開き奉る子細の事』と題する書状にくわしく述べられている。⁽³⁾その全文は第7図に示したが、藤澤一夫氏が読み下し文を紹介され

護法進

奉開行基菩薩生馬山御廟大和國有里村子細事

右去天福二年六月廿四日酉刻行基菩薩親託宣僧慶恩曰我誕生以來五百六十七年入滅已後四百八十六年也化緣既盡雖大滅度緣感相續無昌時至而人民不信牛馬狼藉也速除不淨可崇敬之若作起心不隨我教災火來降里不安各申云世屬末代人少信心願示瑞相更信敬又告曰誠有且謂我墳墓上有石塔第二層級舍利二粒奉納之來廿六日辰刻可開見之又我事者和泉國大鳥郡善光寺有記文刻紙紙收書之任御託宣之趣同廿六日開石塔之處二粒御舍利新出現爰群集道俗僧成梵立石塔者近世時立舍利出現恐非勝事次仍復侶加祈請之處善獲御母儀又託慶恩曰示舍利在所付有疑心我且先度告可尋善光寺件堂東南二面有池西北二面有竹面有浮橋

謹みて注進

行基菩薩生馬山御廟大和國有里村を開き奉る子細の事。

右、去んぬる天福二年六月廿四日酉の刻、行基菩薩、親しく僧慶恩に託宣して曰はく、我は誕生以來五百六十七年にして、入滅已後四百八十六年なり化縁すでに盡き、滅度を久しくすと雖も、機感相催はし、繁昌の時いたる而るに人民は信ぜずして牛馬狼藉せり、速かに不浄を除き、之れを崇敬すべし、若し疑心をなし、我が教えに随わずんば、災火出来し、隣里安からざらん云々、各々申して云わく、世は末代に属し、人に信心少し、瑞相を顯示して宣しく信敬せしむべし云々、

又、告げて曰わく、誠にその謂われあり、我が墳墓の上に石塔あり、第二層級に舍利二粒これを受む、来る廿六日の辰の刻に之れを開き見るべし、

又、我が事は和泉国大鳥郡善光寺に記文あり、紺紙五枚に之れを書けり云々、

御託宣の趣に任かせ、同じき廿六日、石塔を開くの処、二粒の御舍利あらた(新)に出現す、爰に群集の道俗、猶ほ疑いを成して云わく、此の石塔は近世に立つる所なり、舍利出現は恐らく勝事に非らざらんか云々、

仍って住侶、祈請を加うるのところ、菩薩の御母儀また慶恩に託して曰わく、舍利の在所を示すこと、何ぞ疑心あらんや、且つ先度の告の如く尋ねべし、善光寺の件の堂の東南二面には池あり、西北二面には竹あり、南面には浮橋あり、記文は彼の堂の西より第二の柱の中に在り云々、

又、曰わく、先ず十二口の僧を以って祈請を加え、然る後に乃ち遺体を

記文有彼堂之在日西第二柱中、又曰先以上
 口僧加開清然後了奉願遺野可敬感之、
 依之同廿九日相尋和泉國大鳥郡之慶善後
 院生所蜂田郷家原寺其相志有合衆宣之
 狀而彼寺僧等云此堂朽損修補在近記文有無
 其次可決、又同十二月廿五日自内初刻至十日
 後慶恩之室内日煙忽起之陣更之輩成燒
 巨思未集求火散不見之而其煙立登而覆
 善隆御廟、又文曆二年八月十日如前龍僧
 慶恩曰我為衆生利益起此千人重現瑞相而
 信受者甚少今月廿五日須開我廟散人疑心願
 法德若猶不信之室送日、若忽發火火可燒
 伴陳里去年之煙即我廟示也、依之同月
 廿日彼寺僧等而三輩尋來坏滅之草卷
 其後御託宣重疊之上又有嚴重之瑞相仍未
 翌日秋奉極御廟之處土氏魁弱進退有懼而
 汝做敬思但似有宿緣早企奉土可奉願之

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

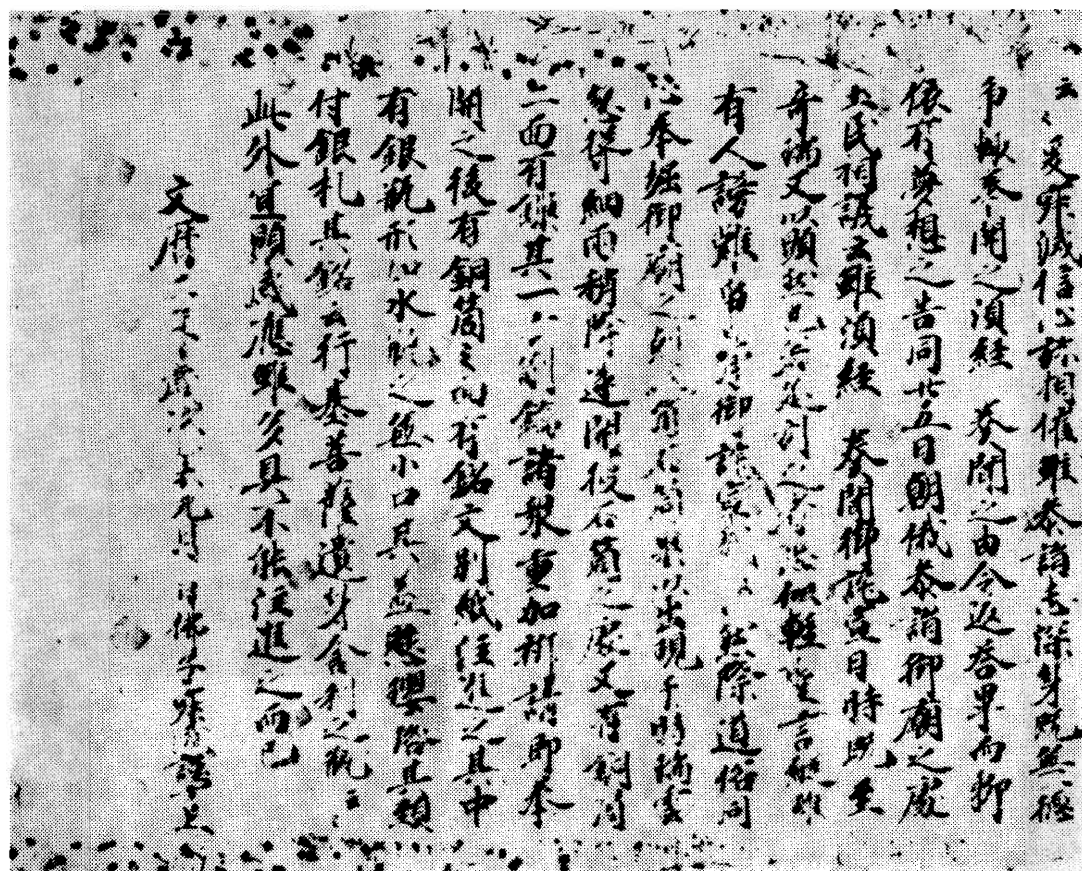
頭わし奉り、疑心を散ずべし云々、委細は別紙に在り、之れに依って同じき
 廿九日、和泉国大鳥郡の菩薩の誕生所、蜂田郷の家原寺を相い尋ぬ、其の相
 は悉く託宣の状に符合す、而して彼の寺の僧等曰わく、此の堂、朽損して修
 補するは近きにあり、記文の有無は其の次いでに決すべし云々、

又、同じき十二月廿五日、酉の初刻より日没に至るまで、慶恩の室内に白
 煙たちまち之れに充つ、隣里の輩、焼亡の思いを成し、来たり集まって火を
 求む、敢えて之れを見ず、而して其の煙は立ち登って菩薩の御廟を覆う云々
 又、文曆二年八月十一日、前の如く僧慶恩に託して曰わく、我れ衆生利益
 のため人に託宣す、重ねて瑞相を現わす、然り而して信受するもの甚だ少
 し、今月廿五日、須らく我が廟を開き、人の疑心を散じ、以って法徳を顕わ
 すべし、若し猶お之れを信ぜず、空しく日月を送らば、忽ち災火を發して隣
 里を燒き淨むべし、去年の煙は即ち我が示すところなり云々、

之れに依って同月廿一日、彼の寺の僧等兩三輩、寂（僧寂滅）の草庵を尋
 ね來りて云わく、その後、御託宣重疊の上、又、嚴重の瑞相あり、仍って來
 る廿五日、御廟を掘り奉るの処、土民踴躍、進退に憚りあり、而して汝の
 帰敬は他に異り、宿縁あるに似たり、早く参上を企て、之れを頭わし奉るべ
 し云々、

爰に寂滅の信心いよいよ相い催はし、参詣の志深く、身すでに一徳なしと
 雖も、争かか輒ち之れを開き奉らん、須らく奏言を経べきの由、返答せし
 め畢りぬ、

而して聊か夢想の告あるに依って、同月廿五日朝、俄かに御廟に参詣の
 処、土民相議りて云わく、須らく奏聞を経べしと雖も、御託宣の日時、既に



第7図 奉開行基菩薩生駒山御廟注進状 (『日本古代の墓誌』による)

奇瑞に至る、又、以つて顯然たるなり、若し之れを延引せば恐らく聖言を輕んずるに似たり、た（縦）とへ人の謗難ありと雖も、争（い）かでか御託宣に背むかんや云々、然る際に道俗、心を同じうして御廟を掘り奉るの剋、八角の石筒はたして以つて出現す、時に瑞雲たちまち聳え、細雨やや降る、遂に彼の石筒を開くの処、銅筒二面あり、鎖あり、其の一方に鑰を副う、諸衆かさねて祈請を加う、即ち之れを開き奉るの後、銅筒の面に銘文あり、別紙に之れを注進す、

其の中に銀瓶あり、形ち水瓶の小口なきものの如し、其の蓋には璽珞を懸け、其の頸には銀札を付く、其の銘に云わく、行基菩薩遺身舍利之瓶とあり云々、

此の外に宜しく感応る顕わすべきもの多しと雖も、具さに之を注進すること能わざるのみ、

文曆二年歲次乙未九月日

仙子 寂滅 謹言上

ているので、ここに引用させていただくこととする。⁽⁵⁾

その大要は、天福二年（一二三四）に竹林寺の僧と思われる僧慶恩に対して行基菩薩の託宣があり、その後も文暦二年（一二三五）までたびたび託宣があったという。そして、遂に竹林寺に所在する行基菩薩の墳墓を発掘したところ、件の舍利瓶が出現したのである。この舍利瓶に刻まれていた「舍利瓶記」は、寂滅が書写し、実物・注進状と共に唐招提寺に提出されたようである。

行基の墓が所在する竹林寺は、行基が生前に建立した寺院の一つである生馬寺が、その没後いわゆる墓寺となったものであり、行基への崇敬と相まって中世以後発展した。嘉元三年（一一三五）、東大寺の僧凝然の記した『竹林寺略録』一卷は、竹林寺創立の縁起と行基の事蹟をくわしく述べているが、その中に、

文暦三_三傍_三三年乙未_{改元}。八月二十五日。菩薩靈廟御瓶出現。自_{其前年}有_{諸奇瑞}。菩薩託宣曰。雖_三化緣盡藏_三形廟_三。根縁亦興_三出利_三之云云。自_三乙未_三至_三今上御宇嘉元三年乙巳_三經_三七十二年_三。其間道俗起_レ信。貴踐致_レ誠。十方來詣。歷_レ年彌昌。然則勝寶嘉曆。唯建_三塔廟_三安置舍利_三。と記し、文暦の舍利出現以後とのえられた墓廟の様子と舍利瓶のことに触れている。

このように行基墓からの舍利出現は、寂滅の注進状に述べられている御託宣によって掘り出されたのであったが、その行為の背景には熱烈的な行基への憧憬と舍利を得たいという強い願望あったことを物語っているのである。

蛇足ではあるが、文暦二年の舍利出現に関連して、『百鍊抄』第十四、四條天皇嘉禎二年六月の項には、

廿四日己酉。中山觀音堂邊稱_三行基菩薩遺骨_三。細研安置之。參詣之輩自由取_レ出之。如_レ物云々。

の記事が見られる。他に関連の史料がないので、舍利を掘り出したことと、ここに記されている内容とのつながりや、どういう目的であったのかという点についてはまったく不明である。また、ここに見える中山觀音堂についても、その所在地は確かでない。⁽⁶⁾

(1) 梅原末治博士「行基舍利瓶記に言えたるその姓氏と享年について」（『考古学雑誌』第五卷、第十二号所収、大正四年八月）、なお本論文も『日本考古学論攷』（昭和十五年十一月）に再録されている。

(2) 水木要太郎氏「行基菩薩の墓」（『奈良縣史蹟勝地調査会報告書』第二回所収、大正三年十一月）

(3) 原本は、『大僧正舍利瓶記』と共に唐招提寺に所蔵されている。全文は『群書類従』史傳部及び『大日本佛教全書寺誌編』に収録されている。

(4) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』（昭和五年七月）に写真が掲載されている。

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

- (5) 藤澤一夫氏「行基菩薩信仰の興行―家原寺行基菩薩和讃の紹介―」（『大阪文化誌』第三卷第二号、昭和五十二年十二月所収）
- (6) 兵庫県宝塚市に所在する西国観音霊場第二十四番札所の中山寺であろうか。または、大阪府枚方市香里に中山観音寺跡とよばれている遺跡があるが、京都に近い位置から後者であった可能性が強い。

三 陵墓発掘の背景

古代末期から中世にかけて、いくつかの陵墓が、その理由はともかくとして、発掘されることのあった実例を、従来知られているものではあるが文献を中心に紹介して来た。当時の数多い記録を単念にしらべ上げて見たら、さらにいくつかの例を加えることができるかも知れない。それは、今後の長期にわたる課題として、とりあえず、これらの文献を中心に問題の核心に入って行きたいと思う。

はしがきで述べたように、陵墓に限らず、全国に所在する古墳の調査において、「後世の攪乱」とか「盗掘」という字句によって表現されている行為が、実際に主体部におさめられている品物（いわゆる副葬品）への関心から、それを入手したいという目的のために陵墓あるいは古墳を発掘したという例であることは事実であろう。これこそほんとうの意味での「盗掘」であるが、それ以外にも、「墓を掘る」「墓をあける」という行為のあったことが想定され、それにはそれなりの動機なり、目的があったに相違ないのである。それは、思想的に何らかの意味をもっている場合もあったであろうし、ある信仰にもとづくもののある場合も考慮しなければならない。こうした行為については、文献に記されている例が僅少であるにしても、発掘調査によってその痕跡を検出することは可能であろう。事実、これまで行なわれて来た数多くの古墳の発掘調査によって、そのことは実証されているはずであるが、何回か述べて来たように、古墳に加えられている後代の行為の痕跡を、単純に「盗掘」とか「後世の攪乱」として見過ごしてしまうことが多かったのではないだろうか。古墳の発掘調査が科学的に行なわれるものである以上、こうした、墳丘あるいは主体部に加えられている後代の行為の痕跡に対しても、考古学的方法乃至思考をもって、その歴史的意味を考える必要があるのではないだろうか。

マルコ山古墳の発掘調査の報道がきっかけとなった本稿の趣旨は、現在のところそれを十分に証明するだけの資料なり論拠を持っているわけでないし、今後にも多くの課題をのこしているのであるが、その要点を記して見ることにする。

先ず、二で取り上げたように、文献に見る限りにおいては、陵墓の発掘された年代が古代末期から中世の初頭、日本史の時代区分でいえば、平安時代後期から鎌倉時代に集中しているということである。このことから推察すると、文献には記されていないものについても、この時期に陵墓をはじめとして、いくつかの古墳が発掘されているのではないかと考えることができないだろうか。ただし、これは全国の古墳がその対象となっているのではないかも知れないし、またふつうの古墳ではなく陵墓だけが対象になっているのかも知れない。

平安後期から鎌倉時代という年代の推定を裏づけるものとして、数多くの古墳の調査例によって知られている瓦器の出土がある。報道を賑わした高松塚古墳やマルコ山古墳の場合にも、盗掘に遭ったと考えられている根拠として石槨の破壊があげられ、その周辺から瓦器碗の出土していることが年代推定の手がかりとなっているのである。古墳、とくに畿内の後期古墳の場合、その主体構造となっている横穴式石室が、築造当時の状態ではなく後世に何らかの手が加えられている場合に、瓦器の碗や皿、あるいは土釜等の出土する例は意外に多い。私の寡聞の知識でも例えば大阪府豊能郡勢町に所在する岩坪古墳では、横穴式石室の閉塞部の上面に数個の瓦器碗が並べられていたし、箕面市桜古墳では玄室の床面よりやや上部で瓦質の土釜が出土した。何基かの調査を行なった東大阪市の山畑古墳群でも同様の例がある。こうした実例は報告書を検索して行けばいくらでもあるだろうし、むしろ常識となってしまうために、かえって顧られることがないのかも知れないが、ある程度の年代を示すこうした瓦器の類が古墳から出土することに重要な意味があるのである。この瓦器類の出土をもって、これまた「後世の攪乱」や「盗掘」と決めつけてしまうことは余りにも早計であり、非科学的であるとさえ言えるのである。⁽¹⁾瓦器のうち碗や皿については、法隆寺の出土例をもって編年を試みられた稲垣晋也氏⁽²⁾、さらに元興寺極楽坊境内出土の瓦製羽釜を編年された伊藤久嗣氏の業績があるが、その生産地や流通経路についてはまだ十分に明らかにになっていない。ただし瓦器類の出土する範囲は畿内に限られているのではないかとこのことを注意しておかなければならない。⁽⁴⁾

次に古代末期から中世にかけて陵墓が発掘されることがあったとして、その理由なり背景にどういうことが考えられるのだろうか。従来はこれを「盗掘」と見ることが多かったが、古墳の築造された年代を仮りに四世紀から七世紀の中ごろまでとして、こうした意味で発掘された時まで数百年乃至一千年しか経ていないのである。いくら中におさめられている品物が欲しかったとしても、生々しい古墳（陵墓をふくめて）に手を加えるということは普通では考えられないことであつたのではないだろうか。それでも確かにほんとうの意味での盗掘が全然なかったという

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

のではないが、こうした面からも当時におけるすべての発掘が「盗掘」ばかりではないと考えるのである。二で取上げた陵墓のうち、成務天皇陵は若干問題があるので別として、築造年代と発掘された年代を対比して見ると、

	築 造 年 時	発 掘 年 時
聖 徳 太 子 墓	推古天皇三十年(六二二)以後	天喜元年(一〇五四)
天 武・持 統 陵	持統天皇元年(六八八)	文暦二年(一二三五)

となり、その年代差は四〇〇乃至五〇〇年しかなく、現代とはちがって当時においては、対象とした陵墓が聖徳太子墓であり、天武・持統陵であることを当事者は十分承知していただろうと思われる。従って若し盗掘であるなら、それを承知の上であり、逆にいえば被葬者が明らかであったからこそ、それを対象にしたとも考えられるのである。中世に盗掘されたと推定されている高松塚古墳やマルコ山古墳も、現代でこそその被葬者の伝承が失なわれ、現代の学者が推論や憶測を述べているのであるが、飛鳥の地に存在し、大和国家によって重要な意味をもつこれらの古墳は、少くとも中世においては、その被葬者名は十分伝えられていたのではないだろうか。そうした場合、敢えて陵墓である可能性の強いこれらの古墳に対して、後世の行為が加えられているという事実は、やはり「盗掘」ではすまずこのできないそれなりの理由があったと考えるのは決して妄想ではないと信じるのである。

次に発掘の背景であるが、私はそれを当時ひろまった舍利信仰と結びつくものであり、それに加えて、聖徳太子・行基ら、仏教の興隆に指導的役割を果たした先徳への敬慕・崇拜の思想が影響していること、そしてこの両者は関連連していたのではなかっただろうか考えるのである。

まず、舍利信仰についてであるが、舍利は「シャリ」とよみ、『佛教大辭典』によると、「体・身・身骨、或は遺骨と訳す。即ち死屍又は遺骨を云ふ」と記されているが、ふつう舍利といえば釈迦の遺骨を指し、舍利信仰は当然のことながら、インドにおこり、中国を経由してわが国に伝えられたのである。『日本書紀』によると、敏達天皇の十三年、司馬達止は蘇我馬子に仏舍利を献じ、また崇峻天皇元年(五三八)条には、同じく馬子が、百済から伝来した舍利をもって飛鳥寺の造営を発願したことが記されている。さらに奈良時代になると、唐僧鑑真は仏舍利

三千粒をもち、唐土に留学した空海は八十粒を、円仁は菩薩舍利三粒・辟支仏舍利二粒を請来したという。こうして、東寺・延暦寺・法隆寺等で舍利会が行なわれるなど舍利信仰は大きく発展し、鎌倉時代になると、俊乗坊重源さらに興正菩薩とあがめられた叡尊や、その弟子の忍性が出るに及んで極点に達したのである。

陵墓の発掘とも関連し、舍利信仰との係わりにおいてここでも取上げなければならないのが、建久八年（一一九七）三月二十四日に執行された本元興寺の塔の柱礎から仏舍利百余粒、其他金銀の器を発掘したというできごとである。

本元興寺とは、蘇我馬子が飛鳥真神原の地に建立したわが国最古の仏刹飛鳥寺のことで、平城遷都によって寺籍は平城京の区域内に移って元興寺となったが、飛鳥の故地には本元興寺として堂塔が遺存していた。建久七年（一一九六）、本元興寺の塔は雷火によって焼失したが、その塔跡から仏舍利が取出されたのである。このことは、当時東大寺別当であった権大僧都辨曉が記した注進状⁽⁵⁾によって知ることができる。冒頭に

注進

建久八年三月廿四日戊戌従大和國本元興寺塔心柱下所奉⁽⁴⁾掘出之御舍利其數百餘粒并金銀器物等本縁事

と記し、以下聖徳太子傳を引用してわが国に仏舍利が伝来した由縁を述べ、本元興寺の塔跡におさめられた仏舍利は蘇我馬子が感得したものであることを縷々述べている。そして最後に、

共是朝家第一之珍寶以何比之爲被添御信仰引傳記文、粗注進如件
と結んだ長文である。

昭和三十一年度から、奈良国立文化財研究所によって行なわれた飛鳥寺塔跡の発掘調査はこのことを証明した。塔跡は、現在の飛鳥大仏すなわち安居院本堂の南がわに当たるが、塔心礎石は、表面下二・七呎のところに埋められていた。その間に建久当時と考えられる掘形があり、建立当時の舍利容器は失われ、かわって納められた建久七年の墨書銘のある粗末な箱におさめられた舍利容器が発見されたのである。⁽⁶⁾当初の舍利はどのような行方をたどったのか知る由もないが、この建久八年における発掘は、当時における舍利信仰と大きなつながりのあるできごとであったことを示唆するものであろう。檜隈大内陵が何者かによって発かれ、御託宣によって竹林寺の僧慶恩が行基の墓を掘って舍利瓶を得たのは、共に文暦二年のことであったが、本元興寺の塔跡から舍利を掘り出した建久八年から数えて三十五年後のことであり、これらの事件をひき

古代末・中世における陵墓の発掘とその背景

起こした動機なり目的なりには、何か相関連するものがあつたと考えられるのである。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、世情は不安であつた。政治のみだれや飢饉・天変地異さらに戦乱の相次ぐ中で、人びとは仏法失墜して効なき末法の世の到来と信じた。いわゆる末法思想である。一方、人びとは現世への愛着を捨てて、ひたすらに阿弥陀如来の坐す極楽への往生をねがった。こうした中で、弥勒仏への憧憬や浄土教がひろまり、さらに浄土宗・浄土真宗・時宗等、鎌倉新仏教が発展して行つたことは仏教史の説くところである。また仏教の新しい動きと呼応して、南都を中心とする旧仏教の中にも、人びとを救うために実践的活動を展開する僧侶が輩出した。叙尊であり忍性である。この二僧は、常に奈良時代の高僧行基を指向し、模範とし理想としていたことはその業績を見ると明らかである。⁽⁷⁾

このように、仏教史の上から見ると、平安時代末から鎌倉時代にかけて、すなわち古代末期から中世初頭という時代は、新しい信仰や新しい仏教を生み出したのであつたが、こうした動きと共に、仏教そのものを見直そう、仏教を原点にかえそうとする思想的背景のあつたことも見逃すことができない。仏教を原点にかえて考え直すということはとりも直さず釈迦の教えにかえろうということであり、すでに述べた仏舍利への敬仰すなわち舍利信仰はこれに根ざすものである。こうして各寺院に舍利塔がもたらされ、舍利殿が造営されたのである。またわが国において、仏教の弘通に大きな足跡をのこした聖徳太子への讃仰がおこつたのも仏教の原点にかえろうという動きと軌を一にするものであり、太子の一生を描いた絵伝や聖徳太子像がつくられたのもこの時期であり、同じ思想的基盤に立っているのである。さらに又、鎌倉時代の仏教は新仏教にしても旧仏教にしても、聖徳太子への尊崇が重要な部分を占めていたと見られていることにも注意を払わなければならない。⁽⁸⁾

問題を大きくひろげてしまうことになったが、こうして見ると、聖徳太子への讃仰は、必然的に太子の遺骸の眠る墓廟（磯長墓）への巡礼・礼拝につながるものであり、舍利信仰のひろまりは本元興寺塔刹の仏舍利の掘出、行基墓の発掘を起こす直接の動機であつたと考えるのが自然であろう。これをさらに発展させて見ると、天皇・皇族など、高貴な方々の遺体も、釈迦や聖徳太子と同格に舍利として仰がれ、託宣によって行基の墓を掘って舍利を得たのと同様に陵墓を発掘したのではないかという私の愚かな発想にようやく到達するのである。

以上はまったく妄想に過ぎないかも知れないが、陵墓の発掘が話題にのぼっている時でもあり、古墳発掘への取組みについての反省をふくめてたとえ愚かであっても私の考えを記して見た。十分説明し尽くしていないが、さらに考えを進めた上で改めて稿を起こすこととし、一まず筆

をおくこととする。

- (1) 古墳から出土する瓦器については、私自身の調査例を中心に別の機会に紹介するつもりである。
- (2) 稲垣晋也氏「法隆寺出土の瓦器碗・瓦器碗編年試論」(『大和文化研究』第三六号、昭和三十六年四月)
- (3) 伊藤久嗣氏「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』昭和三二年)
- (4) 畿内盛行した瓦器碗に対して、同時代に、たとえば東海地方や伊勢湾沿岸の山茶碗、あるいは最近発掘調査の行なわれた兵庫県明石市の魚住古窯跡で焼成された碗など、古墳から出土する中世の上器全般を考える必要がある。
- (5) 奈良市の水木直箭氏の所蔵されていた文書(水木文書)で、『大日本史料』第四編之五、建久八年三月の項に全文がのせられ、また(5)の飛鳥寺跡の発掘調査報告に写真版が掲載されている。
- (6) 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』(昭和三十三年三月)、および坪井清足氏『飛鳥寺』(中央公論美術出版、昭和三十九年二月)を参照。
- (7) 叡尊・忍性のことについては、本字和島芳男教授著の『叡尊・忍性』(吉川弘文館人物叢書30、昭和三十四年八月)を参照した。
- (8) 田中重久氏『聖德太子繪傳と尊像の研究』昭和八年八月、菊竹淳一氏『聖德太子絵伝』(日本の美術91、昭和四十八年十二月)
- (9) 金治 勇氏『聖德太子信仰』(春秋社、昭和五十四年三月)を参照。

〔追記〕 本稿の校正中に『大阪府史蹟名勝天然記念物』第一冊所載の叡福寺の項を見ると、同寺に「瑠璃石の碑」なるものが伝えられていることが記されている。そして、同書にも記されているが、古く狩谷掖斎がその著『古京遺文』にこれが「後人の為託に係る」ものとして取上げ、おらず、学術的価値を認められていない資料のようである。しかし、こうしたものをつくり、「太子御記文」として流布させた動機ならびに時期に、歴史的意味を認める必要があると思うのである。

なお、この瑠璃石については田村隆照氏が「上の太子叡福寺の寺宝」(『佛教藝術』第一一九号、昭和五三年八月)に紹介されていることを附記する。